熊の彫刻

木彫りの熊はアイヌ芸術の代名詞となっています。鮭を捕まえようとする姿勢や、木の丸太の上でバランスを取りながら吠えている姿など、動的なポーズで動物が表現されています。これらの彫刻はアイヌの木彫り技術の優れた例証であると同時に、19 世紀後半から 20 世紀にかけて和人（民族的日本人）の北海道への移住が増加する中でアイヌが直面した苦難を象徴するものでもあります。

アイヌの精神文化において、熊は「キムンカムイ」（山の神）の化身とされています。他の神聖な動物と同様に、クマは伝統的には捧酒箸、儀式用の頭飾り、その他の儀式用具を飾る抽象的なモチーフとしてのみ表現されていました。これらの動物を写実的に描写すると、邪悪な「カムイ」（神々）が宿り、害をもたらす可能性があると信じられていました。しかし、1900 年代初頭、アイヌは生計を立てる手段として、販売用の熊の彫刻を作り始めました。

19 世紀に和人による北海道の開拓が進むにつれ、アイヌの先祖伝来の土地は接収され、彼らが頼りにし、生活を支える狩猟や漁労が禁止されていきました。仕事を探すためにその地域を離れる人々もいれば、観光客に手工芸品を売って何とか生計を立てようとした人々もいました。木彫り職人たちは当初、箸や盆、皿などの日用品の販売をしましたが、観光業の発展と

ともに装飾的な置物へと制作の幅を広げていきました。